令和５年度　松戸市協働のまちづくり協議会　第６回　議事概要

【日時】令和５年１１月１２日（日）９：３０～１４：３５
【場所】議会棟３階特別委員会室
【出席者】犬塚 裕雅 会長、牧野 昌子 副会長、神谷 明宏 委員、
山口 恵理子 委員、羽村 太雅 委員、星野 健一 委員、
田中 勝規 委員
（欠席）坂野 喜隆 委員、小川 早苗 委員
【傍聴者】４名

１　委員参集
※委員定数確認、配布資料確認、傍聴許可確認
・協働事業提案制度/市民活動助成制度の申請事業に対する利害関係の有無を確認した。
２　開会
３　協働のまちづくり協議会　会長挨拶
４　協働のまちづくり協議会　委員紹介
５　令和６年度実施分協働事業・市民活動助成事業プレゼンテーション

【協働事業】
（１）
事業名　：まつど de SDGs の輪を広げようプロジェクト事業
団体名　：まつど地域活躍塾つながりの会
担当課　：政策推進課　市政総合研究室
委　　員：市民の方々に対する SDGs の見える化が不足しているかと思う。例えば NHK では SDGs の歌を作って子どもの番組で流している。市民のレベル、そして次の世代を担う子ども達に広げていく取り組みについて、例えば、歌の募集、PR イラストの作成、SDGs のかるた大会、SDGs のダンス等があると考える。団体だけに任せるのは少し辛いかと思うので、市の担当者に意見を聞きたい。
担 当 課：現在、市では Z 世代との SDGs の事業ということで大学生と活動をしている。その一つとして、今年度は常盤平団地にて大学生が主体となり、小中学生を対象としたイベントを、外国人の子どもも参加できるような形で開催した。参加者を増やしていくためにどうすればよいかといった課題はあるが、こういった活動を続けていくことで、SDGs の裾野を広げていきたい。

委　　員：ネットワーク団体を3団体新たに追加するという話があったが、もっと増やすことはできないか。企業等様々な団体があるので、もう少し野心的な目標を立てても良いかと思った。千葉県でもリスト化されたものが既にあるので、積極的に声をかけたり、取組の進んでいる他市を参考にしたりすることで、もっと数を増やせるのではと思う。また、現時点での市の取組はどのようなものがあるのか、どのように連携を進めていくのか。限られた時間の中でどのように効果的なアクションをとるのか、という点を教えてほしい。

団　　体：ネットワーク団体について、指摘のとおりもっと増やしていけるように努めていく。あわよくば近隣他市も巻き込んでやって行ければと考えている。またご指摘のあった千葉県のリストも見ながら、できるだけ広く裾野を広げられるよう努力したい。

担 当 課：今年度もスモールスタートではあるが、団体と連携した取組は進めている。団体の主催する地域学習会において、市で取り組んでいるSDGsの活動について説明した動画を流し、今市で行っている取組を周知している他、現在団体で作成している事例集や今後開催を予定しているアクションプランコンテストに大学生の取組みや提案を取り入れていく。また、地域学習会へ大学生にも出てもらって、活動について発表してもらう。このように、市の取組と団体の取組は連携して一緒にやっていく、という形で考えている。

委　　員：地域活動の主体となる高齢者へのアプローチはどう考えているか。

担 当 課：高齢者層に向けてのアプローチとして、団体と連携した取り組みにおいては地域学習会が一番のポイントとなっている。活動の主体となる方の高齢化が進んでいることで、参加者も高齢者層が多いこともあり、市の取組についてはそういったところで周知できるのではないか。また団体が作成中の事例集を活用して、市内の団体などのSDGsの取組を具体的に伝えていきたいと考えている。事例をPRしていくことによって、市内で行われている活動がSDGsに繋がっているという実感を、多世代に伝えられるように進めていきたい。

委　　員：担当課に聞きたいが、市としての弱みの部分を、協働でどのように補完できると考えているか。

担 当 課：市はSDGs未来都市としてSDGs推進の取組みを展開しているが、市として実施する取組みがメイン。そのため市民や市民団体からのボトムアップという面では弱い部分があると考えており、今市民活動団体として活動しているつながりの会と連携することで、ボトムアップで事業を推進していくことが重要だと考えている。

（２）

事業名　：地域まるごとで孤育てを予防する連携システム事業

団体名　：まつどでつながるプロジェクト運営協議会

担当課　：子ども政策課

委　　員：市民サポーター養成講座について、これまでの参加者数はどうか。地域の中でどのようにコミュニケーションをとり、どう活かしていくのか。 また、サポーターと支援先をどのようにマッチングさせるかについてお伺いしたい。

団　　体：講演会は定員 50 名のところ 20 名、連続講座は定員 20 名のところ 20 名弱の応募があった。その後のつながりについて、連続講座においては 1 名を除き継続を希望されて、団体から定期的に情報を発信している状況。その中には団体が取り組んでいるイベントをお手伝いいただく形で実践している方や、行政のイベントを紹介した方、日常の中で気を配っている方など、今は母集団形成を図っているところなので様々である。

委　　員：ボランティア養成の先の活動場所について、子育て広場などいろいろな場所へのマッチングの成果を聞かせてほしい。

団　　体：いくつかの活動場所が考えられるが、子育て広場事業、放課後児童クラブなどがあると思う。講演会で来ていただいた講師にそういった場所の重要性をお話しいただいたこともある。

委　　員：行政の手の行き届かないところを団体が行き届くようにしていると思う。皆さんのような団体が子どもに対して目を向けてくれることは非常に重要だと思うので、多くの方を巻き込み続けて、活動を広げていただきたい。

委　　員：目的にあるように、支援者とのつながりを意識しているが、支援策へのつながりなのか、人とのつながりなのか。最終的には人とのつながりが支援策につながるのが理想だと思う。今現在うまくいっていない理由はどう考えているか。

団　　体：つながれない理由としての 1 つは、そもそもお互いのことを知らないということが大きいと思う。そのため知っていただく機会を増やすことが重要だと考える。もう一つは、知っていてもつながりたくない、という人がいる。行政や民間支援組織に対するアレルギー、支援を受けること自体へのアレルギーがあり、支援者とつながることはハードルが高いので、まずは隣にいる人からつながりをつくることで、気持ちに寄り添うことが大切かと思う。

（３）

事業名　：日本語を母国語としない子どものための学習支援事業
団体名　：認定ＮＰＯ法人　外国人の子どものための勉強会
担当課　：国際推進課
委　　員：取組の中で、翻訳ツールや音声でやり取りできる IT ツールなどの活用はしているのか。
団　　体：新しいものを取り入れるというより、生徒が持っている携帯で対応できるもので十分であると考えている。また、生徒側のモチベーションが上がらず嫌がられていること、スタッフ側の教え方が定まっていないことが原因で、私たちの活動の中でオンラインの利用率は非常に低い。こういったところを解消していくために、少しずつ地道に活用して、会員に効果を周知していき、広げていきたいと思っている。
ただ、世界的な問題として、学校に来られない人が増えているような状況において、オンラインは自宅でもスタッフと向き合えるので良いものだと考えている。
委　　員：子どもの居場所・遊びをツールとして、その中から学習・文化の吸収・交流等へ進展させるということについて、展望を聞きたい。
団　　体：今回提案している子ども食堂との交流は初めての試みとなる。この出張授業で何らかの関わりが出来ればと考えている。毎週 5 つの教室を行っていて、普段の活動がきっちり埋まってしまっているため、今のところ居場所の面で積極的に参入していくことは難しいと思っている。子ども達にとって学習についていけない事は辛いので、学校の授業についていけるようにしてあげたいというのが本懐。出された宿題の問題文の意味がそもそも分からないなど、親御さんにもできない部分なので、まずはそこの支援をしたい。また、親子で一緒に遊ぶ会や先輩と話す会等を実施しているので、そういったことも含めて活動をしている。
委　　員：事業費の大半を占める教室使用料だが、協働事業 3 年目と最終年度となるので、今後市は教室の確保についてどのように考えているか。
担 当 課：生徒が通いやすい場所について、UR 都市機構と協議しているところ。現在収容人数などについて調整をしており、今度見学に行く予定。

（４）
事業名　：みんなで育て　みんなでつくる　沿道の食べられる景観事業
団体名　：エディブルウェイプロジェクトチーム
担当課　：みどりと花の課
委　　員：担当課として、現在の協働事業への取組姿勢を伺いたい。
担 当 課：今回提案の協働事業は来年度からとなることから、実際にはまだ動いてい

ないところとなる。来年度から本協働事業を進めていきたいと思っている。

委　　員：必要な予算を確保したいという場合、市の協働事業でなくても他の助成金もあるかと思ったが、今回協働事業として提案している意図を伺いたい。

団　　体：始まりは自分の研究の一環として、やってみたい、という気持ちで開始した。7 年続けてみて、まちにこの活動が広がったことや、市の助成金をもらって市民活動として育ててもらったと感じる。他の地域の人から興味を持ってもらえることが出てきたが、他地域まで展開する力は団体に無い。そこで市と協働して、どうしたら他の地域に展開できるか一緒に考えていきたい。

委　　員：新しい価値を創造して課題を解決するストーリーもあると思う。他の地域への展開については期待しているが、具体的に展望は定まっているか。

団　　体：申請書の「今後の展望」に記載しているが、来年度については地域の包括支援センターなどの拠点で地盤固めをする。そのうえで担当課と一緒に活動のマニュアル作りを検討している。その後、他の地域にも展開していければと考えている。3 年目では他地域でも少人数グループができれば、その地域で活動していけるような仕組みづくりができればと考えている。

委　　員：力のある団体に任せきりではなく、市としての積極介入も必要と考えるがいかがか。

担 当 課：市としても次年度以降の活動場所の確保など、いろいろ進めているところ。昨年 4 月に公表したみどりの基本計画の中で、みどりのあるライフスタイルを実践する場というものを創っていきたいので、市としても積極的に取り組みたいと考えている。

（５）

事業名　：町会・自治会の活動をＰＲして親しみをもってもらおう事業

団体名　：できる街プロジェクト

担当課　：市民自治課

委　　員：松戸市には 100 か国以上の方が生活している。その外国籍の方の多くは自治会に参加していない。そういう意味では、作成したツールを外国籍の方にもわかりやすくする努力が行政には必要かと思うが、どう考えているか。

担 当 課：松戸市では外国籍の方が増えていることから、来年度はマルチリンガル対応として英語、中国語、ベトナム語に翻訳したものを YouTube 動画に反映出来たらと考えている。

委　　員：動画や漫画を見た市民の感想などがあれば教えてほしい。

担 当 課：漫画冊子に対するアンケートとしては、「話が簡単で分かりやすかった」「めずらしい取組だと思います」「この漫画を通して現在の町内会について知り、入会のハードルが下がりました」「引っ越してきたばかりなので少しずつ自治会の活動に参加しながら、町内会の活動に関わっていければと考えています」といったお話をいただいた。
また、町会・自治会長から、こういった漫画やアニメがあることで、新しく班長になった方が引っ越しされてきた方に対して、町会加入を勧めるアクションがしやすくなったとの話があった。

委　　員：定性的な成果は理解したが、定量的な成果はどのようなものがあるか。
また、団体に質問で、予算計画を見ていると団体側の支出が多いと思うが、この先に何を見据えているのか、伺いたい。

担 当 課：町会自治会に交付している交付金の申請書を基に算出すると、11 月 8 日現在、加入世帯数は絶対数として昨年より約 650 世帯増加している。

団　　体：我々は自分たちがおもしろいと思ったことを取り組んでいる。ただ自分たちだけが楽しいだけではなく、みんなの役に立ったり、みんなの生活が豊かになったりすることがしたいという動機。

委　　員：団体がディレクションを行い、市がプロデュースして、作品が世に広まっていく活動なのだなと思った。個人的にはプロデュース側がもう少し頑張ってほしいと思っている。より広めていくという気持ちを持って取り組んでほしい。

委　　員：この問題を単純化すると「知らない」「きっかけない」「時間ない」の「3ない」だと思う。この内の「知らない」はこういった取組で解消しようとしていて、だんだん浸透していく。「きっかけない」は町会・自治会の現場の人達がどうやってきっかけを作っていくかだと思う。「時間ない」は「ちょいボラ」のように体験する時間を制限することで参加しやすくなっていく。この「きっかけない」「時間ない」の問題を、町会・自治会を巻き込んで取り組むことで、良い形になるのではと思う。

委　　員：効果の部分で、これからも検証しながらやっていただきたい。市民に効果を広められるように。

【市民活動助成事業】
（６）
事業名　：社会起業家・副業家としての創業機運醸成事業
団体名　：サスティナブルな市民活動研究所

委　　員：周知の手段として広報まつどを挙げられたと思うが、この活動に参加してみたいと思う人達にとって、広報まつどが最も効果のある手段なのか。そ

れ以外のアプローチがあるのであれば教えてほしい。

団　　体：現役世代にアプローチしたいと考えている。 広報まつどという紙面のメディアは現役世代にはあまり見られないかもしれないが、課題意識を持って何か働きかけていきたいという人や何か自分の道のヒントを見つけたいと感じている人も現役世代にいると思う。母数は少ないかもしれないが、まずはそういう人に届けていければと考えている。ただ適正メディアとしては疑問に思っているところでもある為、より現役世代が目にするようなメディアについて検討しながら進めていきたいと思っている。

委　　員：持続可能という点をどのようにサポートしていくのか。

団　　体：持続可能ということは様々な要因が絡むため、まとめて解決、とはいかないと思っている。ただ、人、モノ、金、情報と言われるが、具体的に活動する上で一番悩ましい課題は活動費の確保だと思う。コンサルというよりは、伴走という形で同じ目線でサポートしていくことで、新しい糸口を見つけていく活動をしている。また、人の確保という課題については、来年度実施する活動で、若手が社会課題に対して接続していく機会を創造していきたい。

委　　員：「副業」はともかく、「社会起業家」を目指す方は、自分で活動したいと思うため、誰かが立ち上げた団体の後を引き継ごうとは中々ならないのではないか。このまま事業を進めて「社会起業家」を育ててしまうと、市民団体の数だけたくさん増えて、どの課題も解決されないまま、という状況になってしまいかねない。既存の団体とのマッチングという面も進めてほしい。また、団体自身はどのように持続していくのか、お伺いしたい。

団　　体：自分たちが持続可能にしないと伴走している活動が全て終わってしまう。1年目の団体の為、今年度は全て自費で活動している。ただそれでは活動を拡大させていく上で難しいため、どのように自主財源を生み出すか、という点で取り組んでいて、わずかながら収益事業となっている事業も生じている。そうしていく中で他団体に自分たちのノウハウを伝えていければと考えている。

委　　員：セミナーの内容について、どのような外部講師で、どのような講義になるかを教えてほしい。

団　　体：事業計画書にある記載のとおりとなるが、講師については、社会起業家をテーマに活動されている方に出会ったため、その方にお願いしたいと思っている。

委　　員：ボランティアと社会起業家・副業家との違いを教えてほしい。

団　　体：ボランティアと社会起業家の違いについては、白黒つけることが難しく、グラデーションになっているのかなと思っている。今までのボランティア

は「無償」であったと思うが、その考え方だと持続可能ということは難しい。お金を回していかなければ意義のある活動をしていくことができない。それを助成金、補助金に頼っているのは健全ではない。自分たちが価値を創造したものに対して収益化する者が社会起業家。副業のような形でもできると良いなという気持ちで社会副業家という言葉を使っている。

（7）

事業名　：「おひとりさま安心」講演会・相談会事業

団体名　：特定非営利活動法人おひとりさま安心コンシェルジュ

委　　員：講演会について、3 回で 200 人の参加者は実現可能なのか。集客の見込み、方法について教えてほしい。ニーズを模索するとある一方で、把握できていないという記載もある。今把握しているニーズはどのようなものか。予想や見込みもあれば教えてほしい。

団　　体：今年度、市民劇場で 1 度開催したが、雨の中でも約 30 名の参加があったため、手ごたえを感じている。今度の講演会では通常の成年後見と、おひとりさまというテーマを含めるため、1 回 50 人、3 回で 150 人、さらに周知活動をしていけば上積みして 200 人ほどと考えている。また、参加者の中には「おひとりさま」というテーマが刺さって参加してくれた方も複数いた。興味がある方は一定数いることがわかったので、手を差し伸べていきたい。

委　　員：「おひとりさま」というと、「おひとりさま」になった方が行くと思う。これからなることに対して漠然と不安感を抱えている方は多くいると思うが、対象でないと思ってしまう方がいるように思う。その点を踏まえて PR の方法はどう考えるか。

団　　体：潜在的な課題を抱えた高齢者の方向けに、講演会をもって呼び込みたいと思う。

委　　員：相談会は 1 対 1 の対応になると思うが、士業との線引き・区別はどうなるか。

団　　体：相談者の意向により我々がそのまま相談を継続することもあるが、NPO として相談を受けるので包括支援センターなど様々な支援に繋げる。我々が一番足りていないと感じているのは身元保証の部分と思っている。認知症等は成年後見制度に結び付くが、身元保証はまだ社会的には確立できていないので、我々の活動でそうしたことが広がれば、やったかいがあると思っている。あくまで市民活動として、ニーズの模索や相談会を実施していき、おひとりさまの醸成をしていきたい。

（8）

事業名　：殺処分ゼロに取り組む事業

団体名　：あにまるランド

委　　員：動物種としては猫に焦点を当てる活動ということで良いか。

団　　体：犬の殺処分は少なくなっていることから、猫を中心に考えている。市の取組として地域猫活動があるので、猫を取り上げた。「さくらねこ」と呼ばれる去勢された猫についても啓蒙、周知していきたい。

委　　員：予算を見ると、団体拠出金が多く、事業の継続に負担になるかと考えるが、いかがか。

団　　体：妥当な費用として計上したと考えている。

委　　員：事業内容が盛りだくさんで色々なことをされようとしており応援したいと印象を受けた。一方で、活動の焦点を絞ったり、精査して活動を減らしたりしても良いかと思う。また、団体のデザイン力を基に周知チラシをよりよくする等していただけたらいいなと思う。

委　　員：保護団体との連携はどのようなものか。

団　　体：動物愛護センターや里親探しを行っている団体などとの連携を進めている。

（9）

事業名　：『まつどちゃん』シリーズ製作事業

団体名　：まつどアソビティ

委　　員：この事業を知らない状態と仮定したら告知を見落としてしまうかもしれないと思った。出演者募集の計画について教えてほしい。

団　　体：予算概要に記載しているが、ポスター200 部、パンフレット 5,000 部を考えている。この企画について知ってもらうと同時に、受け取った人がいつでも情報提供や出演応募ができるように作る。また、日頃実施している子ども達が実際に集まるあそび場で告知をする。そこに来ている親御さん伝いでも広げていきたい。

委　　員：この動画の長さは何分か。制作の規模はどのくらいか。

団　　体：年 10 回の撮影を行うが、1 回の撮影分を 3 本ほどに分けて配信する。1 本 10 分から 15 分程度にし、見てくれる人の生活にも溶け込める尺を検討している。

委　　員：今後の展望の記載はあるが、さらにその先の展望について聞きたい。

団　　体：現在一番身近な動画配信ツールのため YouTube を手段として選択したが、今後変化すると思うし、変化したらそれに沿う形にする。大事にしたいのは、子どもを中心として大人も遊ぶという文化が地域に根付くこと。リア

ルと YouTube 上で、コミュニケーション・文化として楽しめるきっかけ・実験として行いたいと考えている。

委　　員：市民巻き込み型だと思う。市民 100 人と掲げているが、1 本につき何人を想定しているのか。

団　　体：1 本あたり子どもが 3，4 人。10 本で 30 人程度。出演や親御さんの協力含め、1 本あたり 10 人。また動画を創る中で BGM を付ける人も募集して、総合的に毎回の撮影に 10 人程度の協力、それが 10 回なので 100 人を想定している。

委　　員：外国人の子どもなど、子ども達の多様性にも配慮していけば、よりよくなると考える。

委　　員：内容について、松戸市を紹介するものか。遊びと市の紹介が混ざっているイメージか。

団　　体：回によって松戸市を紹介するものや、子どもの自主性に任せるものもあると想定している。

（１０）

事業名　：「レッツゆとにこ」高齢者の子育てスキルアップ事業

団体名　：子育て＋プラスゆとりにっこり

委　　員：予算概要でイベント参加費が 500 円とある。参加者から 500 円をもらうということか。

団　　体：もらう予定でいる。

委　　員：訪問サービスにはベビーマッサージのスキルだけでなく、一般的な対人スキルや個人情報の保護等も必要。対人研修のような基礎研修も必要では。

団　　体：対人スキル向上も含めて研修を実施し、安心感を持たせるような訪問にしたいと思っている。

委　　員：訪問サービスも有償なのか。

団　　体：具体的には未だ決めていない。交通費など、今はボランティアスタッフの持ち出しで実施している。何とかしたいとは思っている。

委　　員：訪問を受け入れること自体抵抗感があると思う。先方から来てもらう、という方向もあればいいと思う。

団　　体：訪問タイプとイベントが数回ある。イベントでは来ていただいた親子を対象にマッサージをレクチャーするスペースを設けるつもり。

委　　員：無理に扉をこじ開けようとせず、要望を待つことが大切と考える。高齢者は何歳くらいの人なのか。

団　　体：60～65 歳くらい。後期高齢者の人もいる。

委　　員：サービスを提供する相手方の子どもの年齢はどの程度を想定しているか。

団　　体：小学生以下を想定している。

（１１）

事業名　：ぶどうの家　おもしろ実習教室事業

団体名　：特定非営利活動法人　葡萄の家

委　　員：参加される子どもからとったアンケートはあるか。また子ども達の中で、目に見える形での変化があれば教えてほしい。

団　　体：5 歳の子どもが人見知りだったが、これを機に先生に積極的に話せるようになり、また 7 歳の子どもについて、なんでも自分でできると思っていたが、人に頼ることができるようになったとのこと。また子ども達からは「楽しかった。また来たい」との声があった。

委　　員：アンケートやプレゼンを聞くと障害者支援としての意義は分かる。ただ障害者の理解を深めることが事業内容のため、障害というものをより知ってもらう、というものがあると目的達成に繋がるのではと思う。今まで声の掛けられなかった層へのアプローチについても、目標に挙がれば良いと思った。

団　　体：昨年実施した際、講師の先生より聞いたが、教え方は普通の人向けのものではなく、障害者にもわかるように伝えている。同じテーブルで作業することでつながりが生まれることを目的にしている。

委　　員：出来上がったものを見せ合う、走らせあう等、喜びを分かち合う空間づくりはあるか。

団　　体：イベントの最後に実施している。全然知らない人が親しくしている。

委　　員：障害児について、どのような障害を対応しているのか。

団　　体：障害児だけではないが、身体的、精神的問わず対応している。

委　　員：知的障害等は分かりづらいと思う。配慮はどのようにしているのか。

団　　体：一つのテーブルに一人先生が付いている。また我々ボランティアが 4～5 人が回り、一人ひとりへの配慮をしている。

委　　員：8 月で事業終了となっているが、そのあと振り返り等行わないのか。

団　　体：振り返りは行う予定。

（１２）

事業名　：四世代のきずなで、豊かな生活環境を実現する事業

団体名　：小金原みんなでわくわくする会

委　　員：告知方法は掲示板や回覧板で行うと思うが、新規の人を巻き込む際は違った媒体の方が効果的ではと思う。また、コンポストはどのように維持をしていくのか。不要になった時の撤去は誰が行うのか。

団　　体：告知は掲示板や回覧板以外では、民生委員の方などと情報をやり取りし、個別に対応している。コンポストの維持については、プロの人が町内にいるため、そのような人のアドバイスをもらう予定。維持は責任者、リーダーを決めて進めていきたい。

委　　員：昨年度の成果に対する町民の反応は。

団　　体：喜ばれた。子ども達もおじいちゃん世代との関わりで喜んでくれた。学校側とのコミュニケーションもよく取れた。今は幼稚園とコラボしたイベントを企画している。

委　　員：特に参加者は幼児が多いのか。

団　　体：小学生が多い。

委　　員：スタッフに中学生や高校生の活用を考えてもらえれば、もっと広がりが生まれると思う。

委　　員：予算のところで、助成金のうち半分近く外部講師になっているが、講師の役割は講義か。どのようなことをするのか。

団　　体：今までは SDGs の勉強会の講師として呼んでいたが、来季は農業という面で、知識、やり方を学ぼうと思っている。実践を含めたアドバイスをもらう。座学ということではない。

委　　員：従来の町会活動とは違い、関心のない人達にネタを提供する活動だと思う。知ってもらう手段、町会に入っていない人にも興味を持ってもらう為にも、様々なプランを検討してほしい。

（１３）

事業名　：漫画・アニメで松戸の子育てＰＲ事業

団体名　：超普通スタジオ

委　　員：市ではなく子育て団体とコラボする意義を教えてほしい。

団　　体：市とコラボすることについては、過去の動画で既に 1 話作成しているということがある。また、市民の声という点に注目したいと思った。

委　　員：制作で最終的に出来上がったアニメや漫画はどのように発表するのか。

団　　体：まずは団体の SNS、YouTube で発信する。また、市民活動サポートセンターや、モニターが付いているお店に協力依頼のアプローチをしているほか、ＱＲコードで動画、漫画につなげる。

委　　員：制作した漫画 100 冊は街頭で配布するとのことだが、100 部だとすぐに無くなってしまうと思う。より効果的な配布方法を考えてほしい。

団　　体：100 人への該当アンケートで一緒に配布することを考えていたので 100 部にした。改めて検討したい。

委　　員：子育ての分野は過渡期。松戸市も力を入れていて、情報がどんどん更新さ

れている。どのように更新するのか。

団　　体：継続して制作して、アップデートしていければと思っている。

委　　員：情報が古くならないよう気を付けてほしい。

委　　員：出来上がるコンテンツの出来栄えは。一つの作品に対して 12 名の参加は多いと思う。さらには子ども。どのような子どもの参加を想定しているのか。最終的な品質の部分をどのように担保するのか。

団　　体：6 人イラスト、6 人声優。子どもはあくまでデザイン。仕上げはプロが行うので、品質は保証されていると思う。

委　　員：過去に事例はあるのか。

団　　体：ある。

委　　員：作品に自分が関わったという証、クレジットは出るのか。

団　　体：出すつもり。イラストに関わってもらった人についても出そうと思っている。

委　　員：市民の思いと実態の格差はなぜ生じていると思うか。

団　　体：街頭インタビューでは、あまり情報が市民に届いていないとう印象。定期的に発信していけば認識の格差は埋まっていくと思う。

委　　員：拡散力のある媒体を積極的に使ってくれるという認識であっているか。

団　　体：あっている。

質疑以上

６　閉会